

『大毘婆沙論』はその冒頭においてアビダルマが仏説であることを主張し、次いで三蔵の区別を論じている。そこでは同じ仏の大悲から等起したものである等の理由で区別はないとしながらも、様々な視点からそれらの区別をも論じている。興味深いのは三蔵を、経蔵・律蔵・論蔵の順で重要性が増していくかのような説明である。すなわち、①説示の目的がそれぞれ「未だ善根を未だ善根を植えていないものに植えさせるため」「すでに善根を植えたものに、連続・成熟させるため」「解脱を得させるため」であり、②所化の修行段階がそれぞれ「始業位」「已申習位」「超作意位」であり、③「進趣」がそれぞれ「未だ正法に触れていない者に、触れさせるため」「正法に触れた者に学処を受持させるため」「学処を受持した者に諸法の真実の相に通じさせるため」という解釈である。この「アビダルマ至上主義」とも言える立場は、南伝において論蔵(アビダンマ)が、「高度なダルマ」「勝れたダルマ」と解釈されるのを想起させる。また、有部系の説話集である『ディヴィヤ・アヴァダーナ』中に収められている「億耳アヴァダーナ」で主人公が、在家時代に預流果を得、四阿含を学習して一來果を得、沙弥としてマートリカーを学習して不還果を得、三蔵を学習して阿羅漢果を得たとされるのは、『大毘婆沙論』の三蔵観と符合する。

このように阿含經典の地位は、ある意味、三蔵の中で最も低いのである。それは、初心のひとびとの教化という任務を帯びたものであり、それゆえにまた互いに矛盾を含み、必ずしもすべてが文字通りに受取られるべきものではないからである。『俱舍論』においても、論での説示が「ラクシャニカ(法相を述べたもの)」とされ、経での説示が「アービプライカ(教化のための意図を含むもの)」とされるのは以上を踏まえて理解される。経蔵で説かれた釈迦の真意を確定するのはむしろ法相を論定する論蔵なのである。

大乘佛教で論蔵に該当するものは、龍樹、無著などの論師の著作となり、中国・朝鮮や日本では各宗の祖師・人師の著作となっていた。釈迦一代の教えが有力な論師・人師によって「判釈」されるという一見異常でありながら止むを得ない事態は、すでにアビダルマ仏教に胚胎していたのである。

ではそのような視点から例えば法然『選択本願念仏集』の經典解釈を見てみればどのようなになるであろうか。また研究者たちはその「異常な事態」を踏まえてこの著作を理解しようとしているであろうか。